

## **成長に役立つことばを**

コリント人への手紙第一 14章 1-19節

### **はじめに**

第二週に私が説教する場合は、「コリント人への手紙第一」からお話しています。コリント人への手紙第一は、12-14章まで「御霊の賜物」について書かれています。「御霊」とは聖霊のことであり、「賜物」とは能力などのことです。

最初に、12-13章に書かれていた聖霊の働きについて振り返ってみたいと思います。

### **1. 聖霊の働き**

#### **(1)「イエスは主です」と告白させる**

キリスト教では、「主なる神様」こそ唯一の生けるまことの神であると信じていますが、その主なる神様は、三位一体の神であるとも信じています。主なる神様は、父と子と聖霊の三つの位格を持っていますが、唯一であるということです。父なる神様も神であり、神の御子であるイエス様も神であり、私たちの内に住まわれる聖霊も神であるけれども、神は三人いるのではなく、ひとりの生けるまことの神しかおられない、それが主なる神様であるというのがキリスト教の信仰です。

キリスト教の救いは、「イエスは主です」と告白できるかどうかにかかっています。イエス様こそ神であり、救い主であると信じる者に救いが約束されているのです。多くの人は、イエス様は偉大な聖人であり、愛を説いた人であると理解します。しかしあくまでもイエス様は偉大な人間に過ぎないと理解するならば、救われることはできません。イエス様こそ、神が人となられた方であり、まことの神であり、まことの人であると信じるところに救いが起こるのです。

そして、イエス様こそ主なる神様であり、救い主であるという信仰を私たちの心に起こさせて、私たちの口に「イエスは主です」という告白をさせてくださるのが、聖霊なる神様の働きなのです。つまり聖霊は、私たちの心に信仰を起こさせ、その信仰を公に告白させ、私たちに救いに導いてくださる方なのです。

#### **(2)一人ひとりに賜物を与える**

聖霊の働きは、それだけではありません。聖霊は、私たち一人ひとりに賜物を与えてくださいます。私たち一人ひとりに能力を与え、その能力を生かして奉仕の働きをさせ、キリストのからだである教会を建て上げようとしておられます。その意味で、聖霊は教会を建て上げてくださる方とも言えます。

聖霊が私たち一人ひとりに与えてくださる賜物、能力はいろいろな種類があります。コリ

ント教会の場合は、①知恵のことば、②知識のことば、③信仰、④癒やし、⑤奇跡、⑥預言、⑦霊を見分ける、⑧異言、⑨異言を解き明かす、などの賜物が与えられていました。そして、その賜物を用いて、使徒、預言者、教師、力あるわざ、癒やし、援助、管理、異言などの奉仕の働きがなされていたのです。

### (3) 人格の実を結ばせる

聖霊の働きはさらに、私たちの人格を豊かにし、私たちを愛の人へと変えてくださいます。聖霊は私たちの内に、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラテヤ 5:22-23)という人格の実を結ばせてくださいます。

パウロは 13 章で、能力だけでなく、愛を追い求めるようにと教えています。なぜなら、愛がなければ、どんな賜物や能力も生かされないからです。愛があってこそ、私たちの賜物や能力は役に立ち、意味のあるものとなるのです。

パウロは愛についてこのように言っています。「愛は寛容であり、親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人のした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます」(1 コリント 13:4-7)。

愛はすべての人が求めるべきものです。愛がなければ、どんな賜物や能力も意味を持ちません。聖霊は、私たちの内に愛を与えてくださる方なのです。

## 2. コリント教会における賜物を巡る混乱

さて、パウロがこの手紙の中で「御霊の賜物」について書いているのには理由があります。それは、コリント教会の中に「御霊の賜物」を巡って、混乱が起きていたからです。

コリント教会では、「異言」の賜物が特別視され、異言の賜物こそ最高のものであり、信仰深い人は誰でも異言を語るべきだと考える人たちがいたようです。そのため、異言を語る人は高慢になり、他の人を見下すようになり、他の人にも異言を語ることを求めたりするようになっていました。また異言を語れない人は、信仰に自信を無くし劣等感を抱くようになっていました。そして異言を語る人は、教会の礼拝の中で無秩序に異言を語り出し、礼拝は実に奇妙な状態になり、混乱していたのです。

そもそも「異言」とは何でしょうか。2 節を見ると、異言は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語るものだと言われています。そしてそれは、祈り(14:14)であったり、賛美(14:15)であったり、感謝(14:16)であったりするのです。

しかし、異言はだれも理解できないことば(14:2)で、変化のない音(14:7)、またはっきりしない音(14:9)で、明瞭でないことば(14:9)で語られると言われています。ですから周りの人は、その異言を語る人の言葉が全く理解できないのです。パウロは 13-14 節で、「異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません」と言っています。異言を語る人が、自分が語ることばを解き明かすことができないということもあるのです。つまり、異言を語

る人は、自分でさえ何を語っているのか分からないということがあるのです。だからパウロは、異言で祈っても、自分の知性は実を結ばないと言っています。

4 節では、「**異言で語る人は自らを成長させる**」とあります。異言は、自分と神様との関係の中で、知的な言葉ではなく、感情的に高揚し、祈り、賛美し、感謝するものだと言えます。それは恍惚状態で、周りの人から見れば、「**気が変になっている**」(14:23)と見えるようなものでした。それが、コリント教会では、礼拝の中で無秩序に行われている、礼拝のあちらこちらで恍惚状態の人が、意味の分からないことばで祈り、賛美し、感謝している、そしてその人たちは、自分たちのように皆も異言で語るべきだと他の人にも求め、異言で語れない人を見下し、異言で語れない人は信仰の自信をなくし劣等感を抱いている、そのような状況がコリント教会の中で起きて混乱していたのです。

### 3. 求めるべき賜物

パウロはこの混乱を解決するために、1 節でこのように言います。「**愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい**」。

パウロはこの混乱を解決するために、まず「愛を追い求めなさい」と言います。異言を語る人は、自分と神様との関係だけを考えていました。そして、自分を成長させることしか考えていませんでした。そして、異言を語れる自分こそ信仰深いクリスチャンだと高慢になり、異言を語れない人を見下していました。

パウロは、愛は自慢せず、高慢にならないもの、また自分の利益を求めないものであると言いました。異言を語る人たちは、自分の成長のことだけを考え、高慢になり、人を見下していたのです。彼らには愛がなかったのです。彼らは神様を愛していると思っていたでしょう。しかし聖書はこう言います。「**目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません**」(1ヨハネ 4:20)。他のクリスチャンを見下し、愛を示さない人は、神様を愛することなどできないのです。異言を語る人たちは、熱心に神様に祈り、賛美し、感謝しているようであっても、実は本当の意味で神様を愛していなかったのです。

またパウロは、この混乱を解決するために、「**預言することを熱心に求めなさい**」と言います。「**預言**」とは何でしょうか。預言とは、必ずしも未来のことを言い当てる(「予言」)ことではありません。3 節を見ると、「**預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します**」とあります。異言が神様に向かって語るのに対して、預言は人に向かって語るものなのです。人を育て、励まし、慰める言葉を語るものです。また 4 節にあるように、異言が自分を成長させるのに対して、預言は教会を成長させるものなのです。

パウロは、異言は解き明かさない限り、教会の成長には役に立たないと言います(14:5)。だから教会の成長においては、異言よりも預言の方が役に立つ、だから異言で語るよりも預言することを求めなさいと言います。もともと聖霊の賜物は、教会を建て上げるために、私たち一人ひとりに与えられているものです。しかしコリント教会の異言を語る人たちは、教会のためではなく、自分のために賜物を用いたのです。その結果、教会に混乱を招く

ことになったのです。

さらにパウロは、教会の混乱を解決するために、「**霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう**」(14:15)と言います。パウロは、感情的に高揚して祈り、賛美し、感謝することを否定していませんが、知的であることも大切であると教えています。特に教会においては、自分と神様の関係だけでなく、他の人にも分かる言葉で祈り、賛美し、感謝することが大切だと言うのです。

教会が成長するために必要な言葉は、意味の分からない言葉ではなく、人を育てる言葉、人を励まし、人を慰める言葉です。預言は、今で言う説教のようなものでしょう。しかし、皆に熱心に求めるようにとされていますから、預言は説教には限られないでしょう。クリスチャン同士が、御言葉を語り合うこと、そして御言葉を通して互いを育て合い、励まし合い、慰め合うこと、それこそが教会を成長させるのです。

パウロは19節で、「**教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、ほかの人たちにも教えるために、私の知性で五つのことばを語りたと思います**」と言っています。異言は、自分と神様の関係においては役に立つかもしれませんが。しかし教会においては、解き明かさないうり役に立たないのです。むしろ教会に混乱を招くのです。

教会においては、自分と神様の関係だけでなく、他の人のことも顧みなくてはなりません。自分の成長のことだけでなく、教会の成長のことを考えなければならないのです。

## **おわりに**

聖霊は、私たち一人ひとりに賜物を与えてくださっています。それは、教会を成長させるために、与えられたものです。他の人への愛もなく、自分のためだけにそれを用いるならば、教会に混乱を招くことになるでしょう。

私たちは愛を求め、預言することを求めていかなければなりません。御言葉を語り合い、御言葉を通して互いを育て合い、励まし合い、慰め合い、そのような交わりの中で、自分の賜物を生かして、奉仕の働きをし、キリストのからだである教会を皆で共に建て上げていくことが大切なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

聖霊は、私たちの心に信仰を起こさせ、私たちの口に「イエスは主です」という告白を与えてくださいます。また聖霊こそ、私たちの内に愛を与え、愛の人へと変えてくださる方です。どうか私たちが何よりも、愛の賜物を求めることができますように。能力よりも愛を求めることができますように。自分のことだけでなく、他の人を顧みることができますように。自分の成長のことだけでなく、教会の成長を求めていけますように。私たちが、御言葉を語り合い、互いに育て合い、励まし合い、慰め合う交わりを作り、一人ひとりの賜物が豊かに生かされて、奉仕の働きがされ、キリストのからだ建て上げられていきますように。この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。